

〈東方三博士の礼拝〉図像における異邦人表現¹⁾

高 階 絵里加*

は じ め に

十八世紀後半、「コーカシア（白色）」「モンゴリア（黄色）」「エチオピア（黒色）」「アメリカ（銅色）」「マレー（黄褐色）」というように地理的分布と皮膚の色を結びつけて、今日の「白色人種」「黄色人種」といった記述につながるような人種分類の基本をつくり、世界的に影響を及ぼしたのは、頭骨学の祖と呼ばれるブルーメンバハであった。

現在ではしかし、自然科学の分野において、このような可視的な身体的特徴にもとづく人間の分類に大きな疑問が投げかけられている。生物学、遺伝学研究の領域における飛躍的發展が、皮膚の色をもとにして構築された人種概念の語謬性を確認し、また遺伝学的にはたとえば「アフリカ人」として一括りにできるような均質な性格などは存在しないことが、多くの研究者によって指摘された（竹沢 2003；竹沢編 2005；2009）²⁾。形質人類学の領域においては、人間の肌の「白色・黄色・黒色」の区分はすでに意味がないともいわれ³⁾、現在私たちが理解している「人種」という概念に対応する生物学の実態はない、とする見解さえある（ブレイス 2003）。

とはいえ、他方で一般社会においては、とりわけ肌の色の違いをもとにした「白色・黄色・黒色」の三分類がひとつの典型的な人種カテゴライズの方法として根強く定着していることも、また確かであろう。いまだに一般にはごくふつうにイメージされることの多い「白・黄・黒」といった肌色による人種の類別は、いったい何を意味し、どのような視覚的伝統を根拠にしているのだろうか。

本小論では、視覚的伝統における人種の三分区の一つの例として、〈東方三博士の礼拝〉の図像をとりあげる。〈東方三博士の礼拝〉は、西洋美術の中で最も数多く絵画や彫刻に制作され、親しまれている図像のひとつであるが、造形美術において「肌の色による人間の三分類」

* たかしな えりか 京都大学人文科学研究所

が典型的にあらわれる例でもある。その背景には「異邦人を含む全人類を包括する普遍的宗教としてのユダヤ＝キリスト教」の思想が存在し、とくに肌の色の描き分けによって三人の博士が人類の三つの民族を表すという美術上の表現が十四世紀から十五世紀にかけてまず北ヨーロッパにおいて、ついでイタリアや他の国々で定着するまでには、紀元三世紀以来のおもに神学上の歴史的経緯があった。

とくに十五世紀には三人の中の一人が黒人王として描かれる例が増えはじめ、西洋社会において一般にネガティブな価値を与えられてきた「黒い肌」が〈東方三博士〉においては〈高貴な異邦人〉の象徴となっている点は興味深い。ここから近代的「人種」概念以前の時代の異邦人表現としての〈東方三博士の礼拝〉図像の特徴を考えてみたい。

1. 〈東方三博士の礼拝〉とその図像の歴史

〈東方三博士の礼拝〉は〈三王礼拝〉あるいは〈マギの礼拝〉とも呼ばれ、〈羊飼いたちの礼拝〉と並ぶ聖書の中のキリストの誕生に関する二つの話のうちの一つである。東方より赴いた三人の賢者たちが幼子キリストを礼拝するこの逸話は、キリスト教における救済の始まりを意味し、また、信者たちの礼拝の原型ともなった。

物語の最初のテキストである聖書の記述は、以下のようにきわめて簡単である。「……彼ら王の言葉をききて往きしに、視よ、さきに東にて見し星、先だちゆきて、幼児のいますところのうゑに止まる。かれら星を見て、よろこびに溢れつつ、家に入りて、幼児のその母マリヤとともにいますを見、ひれ伏して拝し、かつ宝の箱を開けて、黄金・乳香・没薬など禮物を捧げたり」(『マタイによる福音書』二章)。すなわち、「東方の」「博士たち」(magi, wise men, three kings)⁴⁾ が星の知らせによりユダヤ人の救世主の誕生を知り、「ユダヤ人の王」に敬意を表するためにやってくる。彼らはエルサレムで幼子の生まれた場所を尋ね、ベツレヘムに向かう。そして星の導きにより幼子と母マリアのもとに着き、贈り物をささげて礼拝をする。

造形芸術において〈東方三博士の礼拝〉の図に描かれる場面としては、ユダヤの王を探して東方から星に導かれてやってきた三博士たち(マギ)が、「黄金・乳香・没薬」の三種の贈り物をマリアの膝の上のイエスに捧げ礼拝しているところ、というものが最も多く、その他にベツレヘムへ向かう旅姿を描く道中図や、三人が眠っているところに天使がお告げに現れる図像なども存在する⁵⁾。

「マギ」(magi)とは、本来ギリシア語起源の「マゴス」(magos)からきているという。彼らはペルシア-アナトリアの占星術師であり、紀元後まもなくローマ帝国に広まったミトラ神の儀式を行う祭司であった。そこから東方出身の占星術者、占い師、魔術師などが「マゴス」といわれることになった。したがって、ローマのカタコンベ(地下墓所)に描かれた壁画やビザンティ

ンのモザイクでは、彼らはミトラ教の衣装を身につけ、典型的な「フリュギア帽」すなわち先端が前方に折れている先細りの帽子をかぶっている〔図1〕。『マタイによる福音書』においては、彼らは占星術に優れた学者ほどの意味であり、キリスト誕生のしるしをあらかじめ知って「東方から」礼拝に来たことは、異邦人、すなわちユダヤ以外のすべての世界が、回心してキリストの信仰にいたることの予徴とされている。

〔図1〕《東方三博士の礼拝》（c. 430, Roma, Santa Sabina）

三人のマグは、具体的にどのような姿かたちをしていたのであろうか？『マタイによる福音書』の記述は簡略であり、マグたちの容貌はおろか、人数さえ定かではない。したがって、その後、東方三博士の図像にはさまざまな神学的解釈が加えられ、それらの解釈の影響のもとに、絵画や彫刻は生み出されてきた。以下、先行研究によってそれを概観してみる（Mâle 1922; Kehrer 1908-9; Devisse 1979; Kaplan 1985; 久保 1990; Carr 1997 など）。

まず、三世紀の神学者オリゲネスの解釈により、贈り物の数から人数が三人とされたが、初期の図像の中にはマグが二人、三人、四人、六人、八人、十二人のものも存在するという。まもなく視覚芸術においても、三人という人数が定着する。

同じ三世紀に、キリスト教著述家のテルトゥリアヌスが『詩篇』の記述「タルシシと島々の王たちは贈り物をもたらし、シバとセバの王たちは貢物を入れるように」（71: 10-11）にもとづき、マグを王であるとする。これにより、それまではしばしばペルシア風の衣装の占星術師・博士の姿で描かれていたマグたちは、王冠をかぶり豪華な衣装を身につけた王として描かれはじめる。これにはキリストを「王の中の王（すべての王の中のさらに上位にある王）」とする神学的解釈が裏づけとなった。三博士が王であるとの説は五-六世紀にほぼ定着し、視覚芸術においては十世紀以降から十三世紀頃に完全に定着したという（Mâle 1922: 214; Kehrer 1908-9; Schiller 1971-72: 96）〔図2〕。

また、三人に年齢の差が与えられるようになり、マグは老年、壮年、青年の三人の王となった。この年齢差の表現はほぼ八世紀ごろに定着したようであるが、視覚芸術においては、五二〇年頃のラヴェンナの例もあり、比較的早くから見出せる〔図3〕。しかし、それぞれの博士と特定の名前との結びつきはまだなされない。

イギリスの神学者ベダ（c. 673-735）の著作とされる『コレクタネア・フロレス』には⁶⁾、

〔図2〕 ニコラ・ピサーノ《東方三博士の礼拝》(1260, Pisa, Battistero)

〔図3〕《東方三博士の礼拝》(部分) (c. 520, Ravenna, St. Appolinare Nuovo)

「主に贈り物をしたマギは以下の人々であった。メルキオールは白髪の人で、長い髪と鬚を持ち、紫のトゥニカと短い緑色のマントを着て、紫と白の靴を履き、さまざまな素材でできたミトラ帽をかぶり、金を贈り物に捧げた。二番目はカスパールといい、鬚のない若者で、血色がよく、緑色のトゥニカと短い赤いマントを着て、紫色の靴を履き、主に相応しい贈り物である乳香を持っている。三人目はバルタザールといい、褐色の肌をしていて顔中に鬚を蓄え (“fuscus, integre barbatus”), 赤いトゥニカと短い白いマントを着て、緑色の靴を履き、その手に持つ没薬によって、人の子の死を予言している」(Mâle 1922: 215-6 ; Kaplan 1985: 26) とある。白髪と長い鬚、褐色の肌と鬚、血色のよい肌と鬚のないこと、という三人のそれぞれの外観の描写は、この記述をみるかぎりにおいては、人種間の相違として意識されているというよりは、三つの異なる年代を象徴する一種の記号として用いられているといえ

るだろう。

三人という人数、王であること、はっきりとわかる年齢差。この三点は、数多い〈東方三博士の礼拝〉図像にほぼ共通する特徴として受け継がれていった〔図4〕。

またマギたちはどこからやってきたのかという問題について、聖書の記述では「東方」とあるだけ（婦人も「他の道より己が国に去りゆきぬ」とあるのみ）だが、初期の神学者たちはアラビアかペルシアであろうと解釈していた。その後「東方」とはどこかについて、メソポタミア、ペルシア、南アラビア、バビロン、アレクサンドリア等々、聖書にもとづくいろいろな解釈が登場する⁷⁾。ところがその後新たな神学的解釈が加えられ、キリスト教普遍主義の思想によって、マギは一つの国から来たというよりはユダヤ人以外の全世界の人々を代表すると考えられ

〔図4〕 ジョット 《東方三博士の礼拝》（1304-05, Padova, Cappella degli Scrovegni）

らわれる⁸⁾。このマギ三大陸=三人種代表説は中世の象徴主義として徐々にヨーロッパ世界に定着してゆき（Mâle 1922: 216; Aubert 1953-54: 36），三人のマギの年齢と人種の区分により，〈東方三博士の礼拝〉図像は「あらゆる人類を包括する普遍的キリスト教」を象徴するようになった⁹⁾。十世紀末―十一世紀初頭のアイルランドの説教集では，前述の偽ベーダの記述に「黒（“niger”）」という言葉を加え，「三人目はバルタザールといい，褐色で黒い肌をしていて，顔中にひげをはやし」（Kaplan 1985: 28）としているという。おそらくはこれらの神学的解釈を受けて，造形芸術においても年齢に加えて人種の差を意識した表現があらわれる¹⁰⁾。

〔図5〕 ハンス・メムリンク 《東方三博士の礼拝》（c. 1470, Madrid, Museo del Prado）

るようになった（Vezin 1950: 30-31）。五世紀後半に教皇聖レオ（在位 440-461）は，「すべての人々は，三人のマギにおいて，全宇宙の創造主を崇拝する」（Kaplan 1985: 232）と述べ，三人が異なる国より来たこと，ユダヤ人以外の世界のすべての人々を意味する解釈を示した。八世紀末には，マタイへの注釈に「三人のマギの神秘とはまた，世界の三つの部分であるアジア，アフリカ，ヨーロッパ，すなわちノアの三人の息子たちからその種を発する人種を意味しているということである」（Kaplan 1985: 33）と，マギと三大陸とノアの息子たちを結びつける記述があら

その代表的な例をひとつ挙げるとすれば，現在プラド美術館にあるメムリンクの《東方三博士の礼拝》（1470 年ごろ）であろう〔図5〕。この作品は，その数年前にメムリンクの師であるロヒール・ファン・デル・ウェイデンによって描かれた《東方三博士の礼拝》（《コルンバ祭壇画》中央パネル）ときわめて近い構図をとるが，画面右端に姿を見せる三人目のマギがファン・デル・ウェイデンにおいてはヨーロッパ

人であるのに対し¹¹⁾、メモリンクの場合は黒い肌・縮れた短い髪の毛・イヤリングという「黒人王」に変わっている。両者は帽子を持つ右手をあげるその挨拶のポーズも、膝上の長さの刺繍されたトゥニカにタイツというその服装も瓜二つであるため、人種表現の違いは際立ってみえる。制作にあたってのメモリンク（あるいは注文主）の意図は具体的にはわかっていないが（Devisse 1979: 139-142）、十五世紀後半に各地で増えはじめる「黒人王」の一人であることは間違いない。

では、黒い肌のマギは、いったいどのような背景のもとに美術に登場してきたのであろうか？

2. 黒い肌のマギの登場

十四-十五世紀、ケルンをはじめとする北ヨーロッパ、ついでイタリアにおいて黒人のマギ像の登場を促した条件として、カプランは神聖ローマ帝国におけるマギ信仰の政治的重要性と、帝国の支配権を示す民族的表象としての黒人像の伝統をあげている。神聖ローマ皇帝にとって、最初にキリストを礼拝した王たちの遺骨は政治的重要性をもっていた。三博士の遺骨はまずミラノに集められ、その後一一六四年、神聖ローマ帝国のフリードリヒ・バルバロッサ（在位 1155-1190）の時代に大司教ライナルト・グッセルによりケルンに移され、現在でもケルンの聖ペテロ聖堂に納められている。その後歴代皇帝は、アーヘンにおける戴冠式の後にケルンに立ち寄って三王聖遺物を巡礼するのが常となった。ケルンへの巡礼は十八世紀まで盛んだったという。

神聖ローマ皇帝のなかでもシチリアに生まれノルマン、ビザンティン、ムスリムの文化に触れて育ったフリードリヒ二世（在位 1220-1250）は、異国への関心が高かった（Kaplan 1985: 10）¹²⁾。芸術と科学の庇護者であると同時に自分自身も哲学者・詩人・科学者であり、ナポリ大学の創設者としても知られているこの皇帝のパレルモにある宮廷には、トマス・アキナスをはじめ当時の高名な思想家や科学者が集まったという。一二二四年から翌年にかけてシチリアのイスラム教徒を大量に宮廷に呼びよせ、個人的にも黒人の楽士や従者を雇っていたが、そこには神聖ローマ帝国の支配権が遠い異国にまで及ぶ広大かつ普遍的なものであることを誇示する意味もあった。したがって、この皇帝はのちにしばしば黒人の従者を伴う姿で描かれている。十四世紀の神聖ローマ帝国においても、黒い肌のアフリカ人は、キリストの救済を得るべき多様な民族の代表としてしばしば描かれた（Kaplan 1985: 89）。

また北ヨーロッパには、中世における唯一の黒人聖人と言われる聖マウリティウスの伝統もあった（Suckale-Redlefsen 1987）。聖マウリティウスは伝説的な戦士聖人であり、エジプトのテーベ軍団の指揮者で、異教の儀式に加わることを拒んだために、紀元二八七年、皇帝マクシ

ミリアヌス・ヘルクリウス（在位 286–305）に部下・同僚とともに処刑された。絵画・彫刻では、主としてドイツとイタリア・ルネサンス期の作品に登場する。しばしば褐色の肌で描かれ、ローマ兵士の服装であるが、サルデーニャのサン・マウリツィオ騎士団の紋章である赤い十字

を胸当てにつけた中世の鎧姿をしている。手には殉教者の棕櫚と旗を持ち、旗には彼が守護聖人であるオーストリアの鷲の紋章が描かれることもある。十世紀のオットー一世によって神聖ローマ帝国の守護聖人とされて以来、帝都マクデブルクの大聖堂とハレ市の守護聖人となっていた。マクデブルクの大神父でもあったアルブレヒトはハレのこのマウリティウス信仰に力を入れた人物で、ハレの参事会聖堂を飾るために、画家グリュネヴァルトに《聖エラスムスと聖マウリティウス》〔図6〕の制作を依頼している。

〔図6〕 グリュネヴァルト《聖エラスムスと聖マウリティウス》（c. 1520–24, München, Alte Pinakothek）

さらに、マギ崇拝を民間にも広める大きな役割を果たしたのは、十三世紀に広く読まれたヤコブス・デ・ヴォラギネによる聖人伝『黄金伝説』とともに、カッセルのカルメル会修道士であったヨハネス・フォン・ヒルデスハイムが十四世紀後半

に著した『聖三王伝説』（*Historia Trium Regum*）であった（Kaplan 1985: 62–68; Carr 1997: 55–56）。想像力豊かに三王の物語を描いたこの著作は広く読まれ、多くの新しい視覚イメージを生み出す源ともなった。その一例を挙げれば、ゲッティ美術館所蔵の《ダヴィデとイザヤのいる三人の王の出会い》（1480年）〔図7〕がある。これはケルンの画家の手になる、ゴルゴタの丘における三王の出会いの場面で、画面左手のダヴィデの持つ巻物には詩篇（71: 10–11）「タルシシと島々の王たちは贈り物をもたらし、シバとセバの

〔図7〕 聖バルトロマイ祭壇画の画家《ダヴィデとイザヤのいる三人の王の出会い》（c. 1480, Los Angeles, J. Paul Getty Museum）

王たちは貢物を入れるように」の銘文が、右手のイザヤの持つ巻物にはイザヤ書(60:14)「あなたをさげすんだ者は、ことごとくあなたの足もとに伏し」の銘文が、それぞれ書き込まれている。この出会いはラッパを吹き鳴らして祝われ、それぞれの王は異なる旗印によって区別されている¹³⁾。

『聖三王伝説』が強調したのは、三人の王は異なる場所からやってきたのであり、同じ場所からともにキリストのもとにやってきたのではないという点であった。ゲッティの《三人の王の出会い》では三王のうち最も若い王が黒い肌をしているが、このことは「カスパールは最も偉大であり(または背が高く)、黒いエチオピア人であったことは疑いを入れない」と述べたヒルデスハイムの記述と合致する(John of Hildesheim 1997: 24; Kaplan 1985: 253)。ここでいうエチオピアはほとんど想像上の国で、漠然と「東アフリカのキリスト教国」をさしていると思われるが、ヒルデスハイムは三博士とエチオピアとを結びつける記述の伝統によったのであろう(Kaplan 1985: 226, 234)。

イタリアにおける黒人のマギ登場の早い例としては、一四六〇年代にマンテーニャがマントヴァで描いた《東方三博士の礼拝》がある[図8]。この図像は教会の権威に対する世俗権力の忠誠の象徴であったので、マンテーニャのこの作品はおそらくは君主ルドヴィコ・ゴンザーガのカステッロの新しい礼拝堂のためのものとして制作されたと思われ、その形も祭壇上の壁が用であったらしく凹面になっている。ここでは黒人の登場とともに、三人の人種の違いが明確に意識されている。先述の《ダヴィデとイザヤのいる三人の王の出会い》において

は、三王のうち二人が白人で一人が黒人であったのに対し、マンテーニャの場合、はっきりと三つの人種を描き分け、中世以来のヨーロッパ、アジア、アフリカという三大陸の世界観があらわれている。ヨーロッパ人で老人のメルキオールは、白い肌と深いしわ、そして後頭部に張り出した大きな頭骨とを強調して描かれている。アジアを表す壮年のバルタザールは赤みがかった黄色の肌色をしている。また、鬚がなく最も若い黒人王のカスパールは、イタリアにおける黒人のマギ像としては最も早いものの一例である。

マンテーニャは主君ゴンザーガの宮廷において実際に黒い肌の人々と接したと

[図8] アンドレア・マンテーニャ《東方三博士の礼拝》
(c. 1460, Firenze, Galleria degli Uffizi)

思われる。ゴンザーガ家居室の天井部分に画家が描いた黒人像はよく知られているが [図9]、一四九〇年にゴンザーガ家に嫁いできたイザベラ・デステがアフリカに多大な関心を寄せていたことは、画家の異国への興味をよりいっそう促す一因となっただろう (Kaplan 2005)。

[図9] アンドレア・マンテーニャ《カメラ・ピクタ》天井(部分)(1465-74, Mantova, Palazzo Ducale)

マンテーニャは一五〇〇年頃にも、同じパトロンのために同じ〈東方三博士〉の主題を、今度はクローズアップの半身像でふたたび描いている [図10]。画面いっぱいに並ぶのは聖母子、三博士、マリアの夫ヨセフの計六人の人物のみであり、視点が場面にぐっと近寄っているために幼いイエス以外の人物は半身で切られ、絵の前に立つ私たちは、登場人物の精緻に描き分けられた容貌や表情に眼を奪われる。とりわけ、異国の珍しい耳飾りをつけ、口を半分あけて驚きと畏敬の感情もあらわに聖母子のほうを見つめる右端の黒人王からは、その心の動きまでが読み取れそうだ。

[図10] アンドレア・マンテーニャ《東方三博士の礼拝》(c. 1500, Los Angeles, J. Paul Getty Museum)

同じころ、アルプスの北側ではデューラーがやはりこの主題をとりあげた。一五〇四年の《東方三博士の礼拝》[図11]では、若き黒人王は他の登場人物からやや離れて立つ。聖母子と年長の二人の王がいる画面左半分の背景の空間が石の建物で閉ざされているのに対し、黒人王の背後は青い空と海、山々の見えるひらけた風景であり、両者の属する世界が違うことをはっきりと示している。しかし、デューラーその人に似ているともいわれる壮年の王は顔を聖母子とは反対側に向けてこの黒人王を見つめ、その視線によって二つの世界は結ばれている。救世主の生誕をきっかけにキリスト教世界と非キリスト教世界が出会い、交流が始まり、新しい時代の幕が開くのだと、あるいはこの場面は伝えたいのかもしれない。

〔図 11〕 アルブレヒト・デューラー 《東方三博士の礼拝》
(1504, Firenze, Galleria degli Uffizi)

3. ルネッサンス期のブラック・アフリカンと〈東方三博士〉¹⁴⁾

これまでに挙げた例も含め、十五世紀以降の〈東方三博士〉図像では「ヨーロッパ人の老年の王，アジア人の壮年の王，アフリカ人の青年王」のパターンがひとつの典型として定着してゆく傾向がみられる¹⁵⁾。

キリストに帰依する異教徒の代表のうち最も若い黒人王は、キリスト教化における未熟な段階を象徴的に表すのかもしれないが、この若さはかならずしも否定的な意味合いを帯びているわけではない。十五―十六世紀のキリスト教会は、信者を増やしキリスト教世界を拡大する目的という意味ではブラック・アフリカンたちを歓迎していた面もあり、教皇庁はエチオピアやコンゴからやってきたカトリック王の在外使節や請願書を、敬意をもって迎えた。ブラック・アフリカンたちの改宗を目的としていた教皇たちの中には、奴隷貿易に反対した者もあった (Minnick 2005: 281–282, 299–300)。

ルネッサンス期のイタリアにおいてとくに改宗運動に熱意を持っていたのはイエズス会であり、非キリスト教徒たち、なかでも無学な者、貧しい者、罪人、そして黒人奴隷たちには熱心にキリストの教えを説いた。たとえば十六世紀後半から十七世紀初頭のナポリにおいては、改宗したブラック・アフリカンが今度は改宗を勧める立場となり、日曜日の午後にはイエズス会礼拝堂にまだ洗礼を受けていない黒人奴隷を連れて来て教えを説き、祝福をあたえて主人の元に返したという (Minnick 2005: 286–287, 297)。数は少ないが、シチリア島に生まれたブラック・アフリカンでフランチェスコ会の世俗聖人となり、後にイエズス会の修道院長にまで選ばれたベネデット・イル・モーロ (c. 1524–89) のような人物もいた (Minnick 2005: 298–299)。

このようなカトリック教会とブラック・アフリカンとの結びつきを考えると、〈東方三博士〉図像との関連で興味深いのは、ブラック・アフリカンたちの夢や幻視に聖人や聖母があらわれ、その強烈な視覚的記憶が洗礼を受ける決意を促したとの話を伝えるイエズス会のいくつかの報告であろう（Minnick 2005: 288-289）。近年の研究によれば、当時のブラック・アフリカンたちは夢、幻視、幻聴などによる啓示を重要視していたという（Thornton 1998: 253-257）。彼らの夢や幻視に登場した聖人や聖母の姿は、あるいは何らかの絵画や挿絵にもとづくイメージだったかもしれない。このことと、洗礼を受けるに先立ってはキリスト教徒が身に付けるべき教えを受けてからでなければならず、その上その知識の確認と司教の許可が必要であったこと（Minnick 2005: 289）、さらにブラック・アフリカンの改宗にあたっての大きな問題が言葉の壁であったことを考え合わせれば（Minnick 2005: 300）、彼らに教えを受けるときに視覚的にわかりやすい絵画が用いられた可能性が考えられる。

カトリック教会とブラック・アフリカンとの結びつきを歴史的に検証したミニックは「ルネッサンス期に三人のマギの一人がブラック・アフリカンとして描かれたことに不思議はない」（Minnick 2005: 281）と述べてはいるが、ブラック・アフリカンが〈東方三博士〉図像の鑑賞者であった可能性について言及してはいる。しかしながら、異邦人がキリストに敬意を表するこの図像が改宗運動の中で何らかの役割を果たしたことは、推測しうのではないだろうか。

キリスト教会にとってブラック・アフリカンの流入は、全人類が真実の神の知識のもとに集まり来るとする聖書の命が部分的にでも成就されたことを意味する出来事として、黄金時代の再来とも考えられたという（Minnick 2005: 281）。〈東方三博士〉図像において黒人王は異国情緒溢れる豪華な衣装を身にまとう人物として描かれるのが通例であり、エレガントで颯爽と若く美しい青年像には、まだ見ぬ異国への期待と憧れが感じられる。

4. 〈高貴な異邦人〉のイメージ —— 〈東方三博士〉図像における異邦人表現の特徴

異国への期待と憧れ —— 〈東方三博士〉に登場する黒い肌の王には、たしかに未知の遠い国へのヨーロッパの夢が映しだされている。けれども一般に、キリスト教世界における黒人のイメージは決して肯定的なものではなかった。

キリスト教文化において「黒」という色彩は、神の恩寵をあらわす「光」に対する「闇」の象徴である。したがって、そこから連想されるのは「悪」「罪」「貧しさ」「不幸」「苦痛」「死別」「劣等」「不信心」などの否定的なイメージであり、そのために絵画や写本挿絵においても、悪魔や処刑人、拷問者、異教徒などは黒い肌の色で描写されることがあった。西洋の視覚芸術に表現された黒人像に関する浩瀚な研究書 *The Image of the Black in Western Art* の中に、その豊富な例をみることができる（Devisse 1979: chap. II）。

近年のルネッサンス期におけるブラック・アフリカンに関する歴史研究によれば、こんにち私たちのいう「人種差別」概念がまだ存在しない当時にも「区別」は厳然とあった。十五世紀半ば、ポルトガルの港に黒人たちを乗せた奴隷船がはじめて接岸して以来、ヨーロッパに労働力として送られた彼らは法律上の権利を制限され、文明的にもヨーロッパの人々より劣る存在であると考えられたという (Lowe 2005 a: 7-8)。また、たとえば十五、六世紀のイタリアにおけるポピュラーなイメージの中で、彼らは出自にかかわらず一括して奴隷であるみなされがちであり、内面的には非キリスト教徒であること、外面的には裸体に近い身なりをしていることで文明化されたヨーロッパ人とは差別化され、しばしば無責任、怠惰、酔っ払い、性的放縦といったレッテルを貼られた (Lowe 2005 b: 21-32)。

そのころの現実の社会の中で黒人奴隷の人口に占める割合は少なくはなく、たとえば十六世紀の半ばにはポルトガルのエボラで六-七パーセント (Fonseca 2005: 115)、一五六五年にスペインのセビーリャで七・四パーセントという記録があり (Lawrence 2005: 70)、リスボンやアンダルシア地方都市部では十パーセントを超えるという統計もあった (Jordan 2005: 157, Casares 2005: 250)。スペインとポルトガルはとくに奴隷人口が多かったとはいえ、他の西欧諸国でもかなりの数に達していたはずであるという (Earle 2005: xvii)。したがって十五、六世紀は、それまでも否定的に描かれがちであった黒人が、実際の社会生活の中で目に見える存在となりはじめ、さらにステレオタイプ化されたイメージを付与されてゆく時代であったともいえるだろう。

ところが、このような否定的黒人イメージに、〈東方三博士〉はまったく当てはまらない。黒人王は一貫して、豪華な衣装をつけ理想化された異国の貴人として描かれてきた。なぜだろうか。

中世キリスト教において「黒」という色は、抽象概念としては「悪」「闇」「罪」「死」「喪」「悲しみ」「絶望」などの象徴であったが、人間の肌の色という観点から見ると、キリストの信仰に目覚める異邦の民が、暗い色の肌で表現されることがある。たとえば旧約聖書『雅歌』の一節(1: 5)「エルサレムの娘たちよ、わたしは黒いけれども美しい」のオリゲネスによる解釈によれば、この語り手の花嫁は異邦の民の教会の表象である。彼女は自らを「黒いが美しい」と言うが、これは異邦の民であるために肌の色が白くはなくても、信仰と悔い改めのために美しくなることのできる魂の象徴である。オリゲネスはさらに、聖書においてこのことを予知している箇所はいくつもあり、モーセがめとったクシ(エチオピア)の女や、「地の果て」(エチオピア)からソロモンのもとにやってきたにシェバの女王(『列王記上』十)も、主の知恵を聴くためにやって来た異邦の民の教会の表象である、という(オリゲネス 1982: 87-99)。実際、シェバの女王は、たとえば十二世紀末のニコラ・ド・ヴェルダンによるクロスターノイブルク祭壇画や一五世紀初頭ボヘミアの写本に見られるように、しばしば明らかに黒い肌の高貴

な女性として描かれてきた。シェバの女王が黒い肌で描かれるのは、彼女が最終的に信仰に目覚める異教の象徴だからであり、貢物を捧げるために砂漠を越えてイスラエル王ソロモンを訪問するその主題は、〈東方三博士〉の予型とうけとめられてきた（Chastel 1949）。

また、実際にヨーロッパ人が肌の黒い人々を目にした記録としては、十三世紀以降、キリスト教会と東方世界との交流が進む中で、フランチェスコ会やドメニコ会の聖職者たちがはるばるモンゴルやインドにまで赴いた旅行記が残されている。たとえば十四世紀前半、フランス生まれのドメニコ会士で使節としてアジアへわたったヨルダヌスが実際に目で見たインドの描写では、異国の変わった習俗や珍しい動植物、「黒い人々」が裸体に近い格好をしていることなどがつつられているが、そこには黒い肌そのものをさげすむような記述は見出せない。それどころかヨルダヌスは、インドに住む人々について、「まことに、彼らは男女とも黒くなればなるほど美しい」と率直に述べているのである（Cordier 1925: 73, 115）。

ルネッサンス期になると、人文主義の広がりの中で色彩にも多様な体系が当てはめられるようになった。バクサンドールの研究によれば、たとえば白が最も高貴な色で、黒（“nigrum”）は最も卑しい色だとする色彩の象徴主義に対して十五世紀の人文学者ロレンツォ・ヴァッラは、「白は最も簡素で純粋な色ではあるが、必ずしも最良ではないのである……それでは黒（“nigro”）についてはどういえばよいだろうか。実際のところ、黒は白に劣るものとは考えられていない、と私は思う。カラスも白鳥もともにアポロンの聖なる鳥である……わたしの考えでは、エチオピア人はインド人よりも色が黒いからこそ美しいのである。天は人間の権威など取るに足りないものにつくられたのに、なぜそんなものに訴えようとするのか……万物の創造主がさまざまな色に何ら価値の違いを認めていないのに、なぜわれわれ卑小な人間がそんなことをすべきなのだろうか……色彩の位階秩序について法律を定めようとするのは馬鹿げている」（Baxandall 1988: 84-85）と反論した。また聖母の肌の色についても、「少し色が黒かった（“nigra”）」とする解釈が登場した¹⁶⁾。

「黒」はフィレンツェ大司教聖アントニヌスの神学的体系によれば「謙譲」を意味し、また黒の仲間である「灰色」はアルベルティの四大元素体系によれば土と結びつくことから「大地」をあらわすといい、そこに「黒い色」に対する否定的な意味合いは感じられない。たとえば十二世紀を中心にフランスの中央高地地方に多く存在する「黒い聖母」なども、ケルト民族のドルイド教の伝統と新しいキリスト教の同化により生まれたといわれ、「黒」は大地（暗黒の地中）と生命の創造の源を象徴することから、地母神崇拜とマリア崇拜が重なったものではないかとの説がある（馬杉 1998: 4 章）。

人種の違いによる肌の表現とは異なる文脈のものもあるが、上に挙げたいくつかの例からも、西洋世界における「黒い肌」は否定されるだけのイメージであったわけではないことがわかる。

〈東方三博士の礼拝〉における異邦人の表現は、とりわけ黒人を異国の貴人として描く点で

特徴的であり、その描かれ方は十九世紀にいたるまで変わらない。それは社会のさまざまな変化にもかかわらず生き延びた〈高貴な異邦人〉イメージであるといえるだろう。東方三博士は肌の色にかかわらずキリスト教世界の同胞であり、また肌の色が異なるからこそ、彼らは異教世界の改宗の表象としてふさわしいと考えられたのである。

お わ り に ―― 近代へ続く〈高貴な異邦人〉イメージ

西洋の植民地主義と科学的人種主義が浸透してゆく時代以降、ヨーロッパが世界へ進出し植民地を広げてゆく中で、肌の色の異なる人々は未だ蒙を啓かれていない教化すべき存在とされ、視覚表現にも非キリスト教国の人々の「文明化」「教化」「洗礼」といった図像が多く生みだされた (Honour 1989)。十九世紀フランスの彫刻家であるダヴィッド・ダンジェがストラスブールにあるグーテンベルク記念碑の台座として制作したブロンズの浮き彫り《アフリカにおける印刷術の恩恵》(1840) は「文明化」図像の一例である。

このような「未開性」を強調する異邦人像のいっぽうで、〈高貴な異邦人〉のイメージも新しい形をとってふたたびあらわれる。その背後にはとりわけ、十八世紀以降ロマン主義的潮流の中でクローズアップされる「高貴なる野蛮人」の思想をみいだすことができるだろう。科学や文明は人間に幸福をもたらさない、「万物を造るものの手を離れるときすべては善いものであるが、人間の手に移るとすべてが悪くなる」(『エミール』(1762)) とルソーは考え、シャトーブリアンは『アタラ』(1800) と『ルネ』(1802) において高貴な北米インディアンの牧歌的な理想状態を描写した。イギリスの画家ジョセフ・ライト・オヴ・ダービーの《インディアンの寡婦》(1785, ダービー美術館) は、十八世紀後半以降、〈高貴な異邦人〉の表現が新しい次元を獲得したことを示しており、ここから私たちはあらためて近代における〈高貴な異邦人〉イメージについて考えなければならない。

注

- 1) 本稿は、平成 13-15 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (2)) 「人種概念と実在性をめぐる学際的基礎研究」(研究代表者竹沢泰子) に書いた報告にもとづき、大幅に加筆・改稿したものである。
- 2) いわゆる「ヨーロッパ人」や「アジア人」との差異よりも、「アフリカ人」とされるカテゴリーの中での多様性のほうが大きいことが、数多くの研究者により指摘されているという (竹沢 2003)。
- 3) 「コーカソイド・モンゴロイド・ニグロイド」のような区分は、いわゆるサイエンティフィック・プライオリティーとして積極的に用いたほうがよいとの見解もある (片山 2003)。

- 4) “magi” はもともと“magus”の複数形。本論文では日本語訳として慣用に従い「マギ」を使うほか、場合によって「博士」や「王」を用いることもある。
- 5) 〈東方三博士の礼拝〉の西洋美術におけるさまざまな図像例については、Kehrer (1908-9), Schiller (1971-72), 久保 (1990) 他を参照。
- 6) *Collectanea et Flores*. 近年の文献学では八世紀半ば頃のものとして「偽ベダ」と呼ばれている。
- 7) イザヤ書 60: 6 「彼らはみなセバから来り、黄金と乳香を運び、喜んでヤハウェの誉れあるわざを語る」「セバ」アラビアの南西部（『イザヤ書（下）：旧約聖書』関根正雄訳・註釈、岩波文庫、1975, p. 179.）。詩篇 67: 30 「いと高き者よ、エルサレムはあなたの宮、王たちはあなたのもとに贈り物をもたらす」「王たち」はエジプト、エチオピア、パトロスなどの支配者であろう（『詩篇：旧約聖書』関根正雄訳・註釈、岩波文庫、1973, p. 389.）。詩篇 67 (68): 32 「エジプトの商人は青い布をもたらし、クシはその手工をヤハウェにささげる」「クシはエチオピア」（『詩篇：旧約聖書』関根正雄訳・註釈、岩波文庫、1973, p. 389.）。詩篇 71: 10-11 「タルシシと島々の王たちは贈り物をもたらし、シバとセバの王たちは貢物を入れるように。すべての王たちは彼の前に平伏し、すべての族は彼に仕えるように」「シバは南アラビア、セバも南アラビアか東北アフリカ」（『詩篇：旧約聖書』関根正雄訳・註釈、岩波文庫、1973, pp. 390-391.）。十三世紀の聖人伝説『黄金伝説』においては「三人の博士たちは……ペルシアとカルデアの果てからやってきたのである。そこはシバ川が流れていて、シバ人の国とも言われるところである」とある（デ・ヴォラギネ 1979: 213）など。
- 8) 十一世紀初頭前後には、カルトゥジオ修道会の聖ブルーノが「ノアの三人の息子からすべての人類が生まれ、世界中に散らばって、世界はアジア、アフリカ、ヨーロッパの三つに分かれた」（Kaplan 1985: 238）と述べた。これはすなわちノアの三人の息子であるセム、ハム、ヤフェトがそれぞれアジア、アフリカ、ヨーロッパ人種の起源であり、それを三人のマギが象徴しているとの神学的解釈を意味するが、このように、三人のマギを三大陸と結びつける考え方は、たとえば世界を三つの河（ないし海）で三分割してアジア、アフリカ、ヨーロッパを描く、いわゆる TO 地図にあらわれるような世界観と共通するものである。
- 9) ただし、大洪水を生き延びた唯一の家族に属するノアの息子たちは当然ながら同じ血筋を分けており、普通に考えれば異なる人種であることはありえない。ハムの息子のカナンは奴隷となるべく呪いをかけられるが、もともと奴隷自体は古代より存在したものの、古代には奴隷と特定の民族や肌色との結びつきはなかったと考えられるため、ハムがアフリカ大陸と結びつき、奴隷が黒人のイメージを負うためにはより詳細な歴史的経緯を検討しなければならない（Evans 1980）。
- 10) 絵画では、早い時代の例として十一世紀初頭のある写本で最も若い王が明らかに暗い顔色をしているというものもあるが（Wallraf-Richartz-Museums 1982: 148）、これが人種の違いを意識しての表現かどうかはわからない。また、造形表現の視覚的解釈において三人目のマギに黒い肌の人物を重ね合わせた例に、以下のものがある。十三世紀にはアルベルトゥス・マグヌスが、古代エジプトのプトレマイオス二世とその妻をかたどった二重肖像カメオについて、これをマギと解釈し、さらに三人目の黒い肌のエチオピア人のマギの姿もそこに見られるとのべた（木俣元一「西洋中世における「スボリア」」、『西洋美術研究』No. 15, 2009 年 12 月, p. 166）。
- 11) このマギはシャルル豪胆公の肖像であるとの説もある（パノフスキー『初期ネーデルラント絵画（本文編）』勝・蜷川訳、中央公論美術出版 2005: 194）。
- 12) 三博士の遺骨をケルンに移したフリードリヒ・バルバロッサの孫。祖父と同じホーヘンシュタ

ウフェン家の出身。

- 13) ヒルデスハイムがこの物語を創るにあたって発想の源としたと考えられるのは、遠い国の聖なる黒人の指導者プレスター・ジョンの伝説である。プレスター・ジョンは、中世ヨーロッパに流布した伝説上の人物で、東方に王国を建設したという (Newton 1949: chap. IX; Kaplan 1985: 43-62)。十二世紀頃、十字軍の時代、イスラムの強大化に苦戦していたヨーロッパ中に、どこか東方に強大なキリスト教帝国がありその軍勢が聖地エルサレム奪回のために西進しているとのうわさが広がった。ケレイト部やモンゴル帝国皇室に実際にネストリウス派キリスト教徒がいたことなども動機となって、東方旅行をしたカトリック修道士や商人も、このプレスター・ジョンが何者であるかを突き止めようとした。伝説によれば、プレスター・ジョンは黒人王であり、教会の司祭であり、さらには東方三博士の子孫であるとされていた。十五-十六世紀には、キリスト教徒のいるエチオピアの皇帝がプレスター・ジョンであるともいわれた。一五四〇年にはリスボンで、この「東インドの黒人の君主」の国に滞在したフランシスコ・アルヴァレスの旅行記『エチオピア王国誌』も出版された。
- 14) もちろん、さまざまな民族が住む広大なアフリカ大陸を一括して語ることは本来は不可能であり、また本論「はじめに」でも述べたように、現在ではこのようなカテゴリー化には当然疑問が呈されなければならないが、ルネッサンス期においては、ロウも述べるように当時のヨーロッパ人の大部分はアフリカ大陸内の地理や文化や習俗の差についてはほとんど理解しておらず、その出自の違いにもほぼ無関心であった (Lowe 2005 a: 5-6)。したがってここでいう「ブラック・アフリカン」は、“black Africans”を日本語に置き換えたものであり、特定の歴史的文脈中におけるヨーロッパ人のイメージとしての「ブラック・アフリカン」という意味である。
- 15) 実際にはこのパターンに当てはまらない作品も数多くあり、とりわけ十五-十六世紀のトスカナ地方における黒人のマギ像のほぼ完全な不在などは看過できない問題であるが、今ここでは立ち入らない。
- 16) ドメニコ会修道士ガブリエーレ・ダ・バルレッタは、聖母の美しさについてのある説教のなかで、聖母の肌の色は白でも黒でもなく、あらゆる色を含んだ美しい色であったが、「アルベルトゥス・マグヌスがいつているように、聖母は少し色が黒かったと認めなければならないでしょう。このように考えるには三つの理由があります。第一に民族的な色の点でユダヤ人はどちらかといえば色が黒く、聖母はユダヤの女性だったからです。第二には聖ルカが描き、いまもローマ、ロレート、ボローニャに残る三枚の聖母像は褐色の色をしているという理由からです。第三に類似という理由です。キリストは色が黒かったのですが、息子はふつうその母に似ているものであり、逆もまた然りだからです……」(Baxandall 1988: 57) と述べたという。

主要参考文献

- アルヴァレス、フランシスコ 1980 『エチオピア王国誌』〈大航海時代叢書 第Ⅱ期 第4巻〉池上岑夫訳 岩波書店。
- 馬杉宗夫 1998 『黒い聖母と悪魔の謎』〈講談社現代新書 1411〉講談社。
- オリゲネス 1982 『雅歌注解・講和』小高毅訳 創文社。
- 片山一道 2003 「司会コメント」『人種概念の普遍性を問う 植民地主義、国民国家、創られた神話』京都大学人文科学研究所。

- 久保尋二 1990『「マギの礼拝」図像研究』すぐ書房。
- 蒨勇造 2006『シェバの女王 伝説の変容と歴史の交錯』山川出版社。
- 上智大学（編）1942『カトリック大辞典Ⅱ』富山房。
- 上智大学中世思想研究所（翻訳／監修）1996-1997『キリスト教史』1～11〈平凡社ライブラリー〉平凡社。
- 竹沢泰子 2003「人種概念の普遍性を問う～問題提起」『人種概念の普遍性を問う 植民地主義、国民国家、創られた神話』京都大学人文科学研究所。
- （編）2005『人種概念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを超えて』人文書院。
- （編）2009『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店。
- デ・ヴォラギネ、ヤコブス 1979『黄金伝説 第一巻』前田敬作・今村孝訳 人文書院。
- ブルクハルト、ヤーコプ 1974『イタリア・ルネサンスの文化（下）』〈中公文庫〉柴田治三郎訳 中央公論社。
- ブレイス、C・ローリング 2003「「人種」は社会的構築物か生物学的リアリティーか」『人種概念の普遍性を問う 植民地主義、国民国家、創られた神話』京都大学人文科学研究所。
- ポーロ、マルコ 1970『東方見聞録1』〈東洋文庫158〉愛宕松男訳注。
- 『リュブルック東遊録』1944 妹尾昭夫訳 文松堂書店。
- Aubert, Marcel. 1953-54. L'adoration des mages dans l'art du haut moyen age, *Bible et vie chrétienne*, vol. 4, Paris: Casterman.
- Baxandall, Michael. 1988 (1972). *Painting and the Experience in Fifteenth-Century Italy*, Oxford and New York: Oxford University Press. (邦訳:『ルネサンス絵画の社会史』平凡社 1989)
- Boime, Albert. 1990. *The Art of Exclusion: Representing Blacks in the Nineteenth Century*, Smithsonian Institution Press.
- Carr, Dawson W. 1997. *Andrea Mantegna, The Adoration of the Magi*, Los Angeles: J. Paul Getty Museum.
- Casares, Aurelia Martin. 2005. Free and freed black Africans in Granada in the time of the Spanish Renaissance, *Black Africans in Renaissance Europe*, New York: Cambridge University Press.
- The Catholic University of America. 1976. *New Catholic Encyclopedia*, vol. 9.
- Chastel, André. 1949. La rencontre de Salomon et de la reine de Saba dans l'iconographie médiévale, *Gazette des Beaux-Arts*, février 1949. pp.99-114. Paris.
- Cheyney, Edward P. 1962. *The Dawn of a New Era, 1250-1453*, New York & Evanston: Harper & Row.
- Cordier, Henri. 1925. *Les merveilles de l'Asie par le père Jourdain Catalani de Severac*, Paris: Geuthner.
- Dawson, Christopher, ed. 1955 *The Mongol Mission*, London & New York: Sheed and Ward.
- Devisse, Jean & Mollat Michel. 1979. *The Image of the Black in Western Art II, From the Early Christian Era to the "Age of Discovery" 2, Africans in the Christian Ordinance of the World (Fourteenth to the Sixteenth Century)*, Cambridge, Massachusetts, and London, England: Harvard University Press.
- Earle, T. S. and Lowe, J. P. 2005. *Black Africans in Renaissance Europe*, New York: Cambridge

- University Press.
- Evans, William Mackee. 1980. From the Land of Canaan to the Land of Guinea: The Strange Odyssey of the Sons of Ham, *The American Historical Review*, volume 85, no. 1, February 1980.
- Fonesca, Jorge. 2005. Black Africans in Portugal during Cleynaerts's visit (1533–1538), *Black Africans in Renaissance Europe*, New York: Cambridge University Press.
- Hatfield, Rab. 1970. The Compania de'Magi, *Journal of the Warbourg and Courtauld Institute*, vol. 33, pp. 107–161.
- Honour, Hugh. 1989. *The Image of the Black in Western Art* (2 vols.), Menil Foundation.
- Honour, Hugh. 1989. *L'image de noir dans l'art occidental*, tome 1–2, Paris: Gallimard.
- John of Hildeshiem (retold by Margaret B. Freeman). 1997. *The Story of the Three Kings*, Minnesota: Neumann Press. (originally published in 1955 by the New York Metropolitan Museum of Art)
- Jordan, Annemarie. 2005. Images of empire: Slaves in the Lisbon household and court of Catharine de Austria, *Black Africans in Renaissance Europe*, New York: Cambridge University Press.
- Kaplan, Paul D. 1985. *The Rise of the Black Magus in Western Art*, Studies in the Fine Arts, Iconography, No. 9, Ann Arbor: UMI Research Press.
- Kaplan, Paul D. 2005. Isabella d'Este and black African women, *Black Africans in Renaissance Europe*, New York: Cambridge University Press.
- Kehrer, Hugo. 1908–9. *Die Heiligen drei Könige in Litteratur und Kunst*, Leipzig. 2 vol.
- Lawrence, Jeremy. 2005. Black Africans in Renaissance Spanish literature, *Black Africans in Renaissance Europe*, New York: Cambridge University Press.
- Lowe, Kate. 2005 a. Introduction: The black African presence in Renaissance Europe, *Black Africans in Renaissance Europe*, New York: Cambridge University Press.
- . 2005 b. The stereotyping of black Africans, *Black Africans in Renaissance Europe*, New York: Cambridge University Press.
- Mâle, Emile. 1922. *L'Art religieux du XIIIe siècle en France*, Paris: Colin. (邦訳: エミール・マール『ゴシックの図像学(下)』国書刊行会 1998)
- Meiss, Millard. 1951. *Painting in Florence & Siena after the Black Death*, Princeton University Press. (邦訳: ミラード・ミース『ベスト後のイタリア絵画』中央大学出版部 1978)
- Minnich, Nelson H. 2005. Pastoral care of black Africans in Italy, *Black Africans in Renaissance Europe*, New York: Cambridge University Press.
- Olschki, Leonardo. 1951. The Wise men of the east in oriental traditions, *Semitic and Oriental Studies presented to William Popper*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Schiller, Gertrud. 1971–72. *Iconography of Christian Art, Volume I*, London: Lund Humphries.
- Thornton, John. 1998. *Africa and Africans in the Making of the Atlantic World, 1400–1800 (second edition)*, New York: Cambridge University Press.
- Suckale-Redlefsen, Gude. 1987. *The Black Saint Maurice*, Houston: Menil Foundation; Munchen: Verlag Schnell & Steiner.

〈東方三博士の礼拝〉図像における異邦人表現（高階）

- Tognetti, Sergio. 2005. The trade in black African slaves in fifteenth-century Florence, *Black Africans in Renaissance Europe*, New York : Cambridge University Press.
- Trexler, Richard C. 1997. *The Journey of the Magi, Meanings in the History of Christian Story*, Princeton : Princeton University Press.
- Vaughan, Carolyn. 1998. *The Gifts of the Magi*, Boston ; New York ; London : The Metropolitan Museum of Art and Bulfinch Press.
- Wallraf-Richartz-Museums. 1982. *Die Heiligen Drei Könige: Darstellung und Verehrung*, Katalog zur Ausstellung des Wallraf-Richartz-Museums in der Josef-Haubrich Kunsthalle, Köln : Das Museum.
- Vezin, Gilberte. 1950. *L'adoration et le cycle des mages dans l'art Chrétien primitif*, Paris : Presses Universitaire de France.

要 旨

現在、自然科学の分野においては、可視的な身体的特徴にもとづく人間の分類に大きな疑問が投げかけられている。いっぽうで、一般社会においては、とりわけ肌の色の違いをもとにした「白色・黄色・黒色」の三分類がひとつの典型的な人種カテゴライズの方法として根強く定着している。

本小論では、視覚的伝統における人種の三区分の一つの例として、〈東方三博士の礼拝〉の図像をとりあげる。〈東方三博士の礼拝〉は、西洋美術の中で最も数多く絵画や彫刻に制作され、親しまれている図像のひとつであるが、造形美術において「肌の色による人間の三分類」が典型的にあらわれる例でもある。その背景には「異邦人を含む全人類を包括する普遍的宗教としてのユダヤ＝キリスト教」の思想が存在し、とくに肌の色の描き分けによって三人の博士が人類の三つの民族を表すという美術上の表現は十四世紀から十五世紀にかけてまず北ヨーロッパにおいて、ついでイタリアや他の国々で定着する。

とくに十五世紀には三人の中の一人が黒人王として描かれる例が増えはじめ、西洋社会において一般にネガティブな価値を与えられてきた「黒い肌」が〈東方三博士〉においては〈高貴な異邦人〉の象徴となっている点は興味深い。ここから近代的「人種」概念以前の時代の異邦人表現としての〈東方三博士の礼拝〉図像の特徴を考える。

Summary

The categorization of race by visible distinctions is approached with skepticism by scholars in the field of natural sciences. However, society generally and stereotypically categorizes race into three different skin colours—white, yellow and black—and this view is still quite widespread.

This paper describes and analyzes the *Adoration of The Three Magi*, a subject very frequently represented in Western paintings and sculptures, as typical examples of such visual representation that clearly emphasize the different skin colours of the three subjects. According to the Judeo-Christian universalist tradition, the three magi represent all people—races—on earth, including the Gentiles. During the fourteenth and fifteenth centuries, the three magi were a common expression used to symbolize all mankind, first in northern Europe, then later in Italy and other countries.

In the fifteenth century, one of the magi was represented as a black prince. Although the colour black and black skin have been given negative connotations in the European tradition, the black prince in the *Adoration of The Three Magi* is symbolized as a noble Gentile. If the race conception is seen as essentially modern, the *Adoration of The Three Magi* then represents the expression of the various world races in the pre-modern era.

キーワード：異邦人，東方三博士，人類の三民族，キリスト教，普遍主義